

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第37話

スオミの英雄ヌルミとシベリウス フィンランド

以前航空会社が機内食のうまさを競っていた時代があった。フィンエアーの食事はうまいと評判であったのでいつか利用してみたいと常々思っていたものである。欧州出張の帰りに川崎製鉄の親しい常務とヘルシンキで2泊した。帰国の日空港で彼からアドバイスをもらい、日本ではホテルのパーティーなどで並ぶスモークサーモンは日本への土産に最適だよと勧められ、有り金をはたき沢山買いこみ職場の土産にした。初めて憧れのフィンランド航空を利用した時のことである。

フィンランドについては、何となくカレワラ、スオミ、フィンランディア、アイノラなど断片的な単語は耳にしていたが何を意味しているのか特に調べもしなかった。

フィンランドに最初に関心を持ったのは1964年に開催された東京オリンピックの時である。



白亜のヘルシンキ大聖堂

ラジオやテレビで競技の合間にオリンピックに関するいろいろなエピソードが披露されていたが、その中にフィンランドのヌルミ選手が陸上競技の中・長距離では負け知らずの超人だと紹介されていた。そしてチェコスロバキアのザトベックも凄いが、もっとすごい選手がいたことを知ったのである。今から58年も前の事である。以来フィンランドというとなルミがまず頭に浮かぶのである。

拙い記憶をたどり歴史に名を留めるような人物を

国別に書き出してみるとフィンランドは二人しか頭に浮かんでこない。陸上競技のスーパーマンであるヌルミ選手と作曲家シベリウスである。

ヌルミはフィンランドの誇る不世出の中・長距離ランナーである。オリンピックに3回出場し9個の金メダルを手に入れている。走れば常に負け知らず、その超人ぶりは当時の世界を驚嘆させた。

1952年首都ヘルシンキで開催されたオリンピックでは名誉ある最終聖火ランナーに選ばれている。

パーヴォ・ヨハンネス・ヌルミ（1897年～1973年）は大工の子として生まれ、父亡き後の貧しい家計を助けるために働き、それは結果自身の足腰を鍛えることになった。

兵役に服し走ることに目覚め、トレーニングに工夫を凝らしオリンピックの予選を勝ち抜いていき、1920年開催のアントワープオリンピックに出場し3つの金メダルを獲得している。

そのおかげで暮らし向きもよくなり、さらに奨学金を与えられ進学し学業でも優秀な成績を残している。ヌルミは1500m・3000m・5000m・10000m・1マイルの世界記録を走るたびに次々塗り替えていくのであった。

彼のトレーニングは彼自身の理論に従って自らを追い込んでいくもので、後のフィンランドの陸連コーチを務めた時にその有用性が証明され、彼の指導を受けたランナー達がオリンピックで金メダルを獲得していく。一方彼は知らない者のいない有名人であり、加えて優れた商才を持っていたのでフィンランドの長者番付にも名を連ね、ザトベックも彼を慕いヌルミの店を訪れている。偉大な

天才ランナーヌルミの肖像はフィンランド紙幣に刻まれ、76歳で他界した時は国民的英雄として国葬をもって送られている。

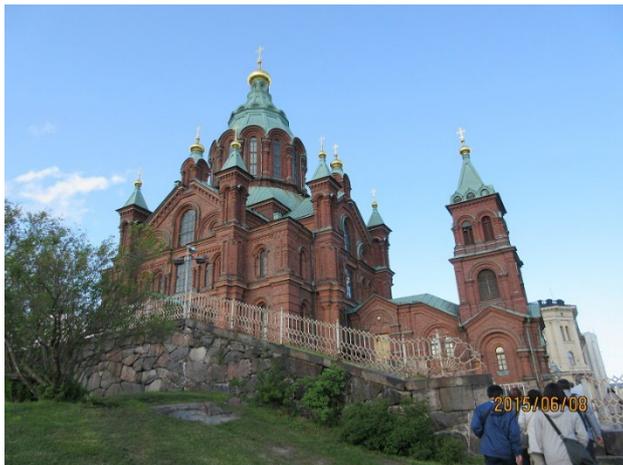
もう一人の著名人は生涯数多くの楽曲を残し、有名な交響曲フィンランディアを作曲したジャン・シベリウス（1865年～1957年）である。ヘルシンキの北100kmにある旧ロシア領ハメーンリンナで医師の子として生まれた。

祖国フィンランドを帝政ロシアから独立させるために、シベリウスは音楽をもって国民の愛国心、独立心を大いに奮い立たせた。チェコのスメタナの“わが祖国”も同様人心を鼓舞した楽曲である。日本の軍艦マーチを聴いて心が自然に高ぶっていくのと同様、音楽には人々の心を自在に操る不思議な力があるのだろうか。

フィンランドではフィンランディアは国民にとっては国歌と同等の扱いだと聞いている。シベリウスはフィンランドに伝わる民族叙事詩カレワラを題材にして数多くの作曲をしている。

シベリウスは最初ヘルシンキ大学法学部で学ぶも音楽の道へ転じ、さらにベルリンに留学し次いでウィーンで学んだ。1899年30歳の時にシベリウスは愛国心からフィンランディアを完成させている。

時あたかもロシア皇帝ニコライ2世がフィンランドをロシア化しようとしていた時期と重なり、国民はフィンランディアを聞いて愛国心をかきたてられていく。



ロシア正教会ウスペンスキー大聖堂

1922年にはフリーメイソンに加盟し、いくつかの儀式のための作曲をしている。50歳ぐらいまでは多くの作曲に積極的に取り組んできたが、何故か後半生には作曲活動をやめ、人々から隠遁したのではないかといわれたが音楽からは離れず活動は続けられた。

1904年にヘルシンキ郊外の湖の畔に自宅である有名なアイノラを建てた。シベリウスの妻の名をアイノと言いアイノラとは＝アイノの居場所という意味であり、アイノラには1957年に亡くなるまで

ここに住んだ。91歳の長寿を全うし国民に惜しまれながら、ヘルシンキ大聖堂で国葬をもって送られ、亡きがらは彼の愛し親しんだ自邸アイノラの庭に葬られた。シベリウスの肖像はフィンランド紙幣に刻まれている。

余談であるがストックホルムに駐在していた友人がいる。退職後隣国フィンランドで豊富な魚を使って寿司屋を開いた。見よう見まねで寿司を握ったのであるが評判がよく財を成した。友人は語学に堪能だが、フィンランド語だけは文法が難解でとうとうマスターできなかつたと述懐している。次いでながらスオミとはフィンランドそのものを指す単語である。